

広辞苑

日本語辞典の最高峰

日本を代表する国語辞典。初版の刊行は1955(昭和30)年。以来版を重ね、その知名度の高さと販売実績において、『広辞苑』に肩を並べる中型国語辞典は他にない。それにしても、あの分厚くて難解そうな『広辞苑』が、なぜこれほどまでのベストセラー&ロングセラーになったのか？



商品開発
の背景
舞台裏

『広辞苑』には、その前身となった『辞苑』という国語辞典がある。大正末期から昭和初期にかけては、三省堂の『広辞林』、大倉書店の『言泉』、富山房の『大言海』など、中型国語辞典が次々と刊行された時期。当時、東京で民俗学や考古学の専門書店兼学術出版社「岡書院」を営んでいた岡茂雄は、中高生でも使える一般家庭向けの国語辞典を作ろうと思い立ち、旧知の間柄だった京大の言語学者・新村出(しんむら・いずる)に編集作業を依頼する。編者はわずか5、6人ほど。その後、内容には百科事典の要素を盛り込むことを決定。岡の発案から5年後の1935(昭和10)年、『辞苑』は刊行された。岡や新村たちの努力は報われ、『辞苑』は瞬く間にベストセラーとなり、増刷を重ねていく。ただ、約16万語を収録した内容には不十分な部分もあり、すぐに改訂に取り組む。辞典の改訂作業は、収録語の見直しと増補、外来語の検討など多岐にわたる。外来語の充実を図るため、岡と新村は、フランス文学者であり、言語学者でもあった新村の次男・猛を編集スタッフに加える。各分野の専門用語は、湯川秀樹や今西錦司など、自身の京大人脈を最大限に活用。いつしか、既に高齢になっていた出に変わり、猛は編集の中心的存在になっていた。時は太平洋戦争の真っ只中。印刷は軍関係の印刷物が優先され、『辞苑』の校正がはかどらない。また空襲に遭って原稿を焼失するかもしれないという、最悪の事態も想定された

辞苑から
広辞苑へ

社会情勢
が一変

見直し作業

初版刊行

この最悪の事態が現実のものとなる。1945(昭和20)年の東京大空襲により、印刷所と倉庫が被災。数千ページ分の活字組版と大量の印刷用紙が焼失し、改訂作業は宙に浮いた。既に『辞苑』の発売から10年が経過していた。

戦争が終わり、岡と猛は、新村家など数ヶ所に残しておいた校正刷りを元に、改訂版の『辞苑』を刊行しようと奔走する。版元が博文館から岩波書店に変わり、書名は、『広辞苑』に決まり、刊行は目の前。が、実際には予想を越える苦勞が待ち受けていた。戦後、社会情勢が一変すると共に、言葉そのものが大きく変化していたから。旧仮名遣いは新仮名遣いに改められ、外来語は怒濤のような勢いで生活に入り込んできた。新語も次々と誕生し、そのひとつひとつを追いかける必要があった。

編集室での作業が始まってから5年後、やっと校正刷りの段階を迎えたが、ここでも内容の偏向、用語解説が難しすぎるなど、様々な問題が発生した。発行予定は1年後に迫っている。もはや時間的な余裕はない。岩波書店は、10人の精鋭社員を伊豆山にある同社の保養施設に招集し、一気に全体の見直しをかけることにした。そこで行われるのは、一人平均300ページを1ヵ月半で点検していくという、気が遠くなるような校正作業。しかし、10人はその困難な仕事を見事に成し遂げた。この合宿は「広辞苑夏の陣」として、今も社内で語り継がれているという。

そしてついに、1955(昭和30)年5月25日、『広辞苑』初版は刊行された。収録項目は約20万。価格は2000円。コーヒー1杯が50円、公務員の初任給が9000円ほどの時代だから、今で言えば4、5万円程度の感覚になるだろうか。驚くほど高価だったが、なんとこれが飛ぶように売れた。当時は、百科事典のように高額な書籍は月賦で買うことができたため、比較的購入しやすかったのかもしれない。

この広辞苑が平成19年、10年ぶりに改訂された(第6版)。10年の間に出現した新語約1万語を収録して、収録項目は24万語になった。「イケ面」「癒し系」「うざい」「着メロ」「めっちゃ」「メル友」「ラブラブ」「顔文字」「逆ギレ」などの新語が新規参入し、「萌え」「イナバウアー」「クールビズ」「できちゃった婚」などが落選してなにかと話題になった。ユニクロでは、改訂を記念して、『広辞苑』Tシャツ10柄を発売した。